

かた
渦

がた
語

り

(十九)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

渦の漁と海の漁

神明町の鎌田健蔵さん（七四）は、かつての渦の漁や海の漁、そしてカラフトや北海道への出稼ぎも経験した方です。現在でも「鎌健丸（二・九ト）」で毎日のように海に出る鎌田さんに、海での漁についてうかがいました。

四馬力のエンジンで海に出漁

俺が学校を卒業したのは昭和十九年。その頃は海に出る人は少なく、江川の浜に船は三艘位しかなかったな。船といつても昔の渦船でエンジンは四馬力。動力船はその一艘しかなかったたので、動力無しの船二艘に長さ三百五十間の「くるま網」を積み込んで沖まで引っぱって行く。漁師は全員で三十人近くも乗ってたな。たった四馬力の船で重い二艘を引っぱるもんだが船足は遅い。網を引くのも人間の力だけだから、朝の二時に出港して網を揚げ終わると夕方四時。春から始めた漁だったども、「これだけは容易でね」ということで七月には切り上げてしまった。

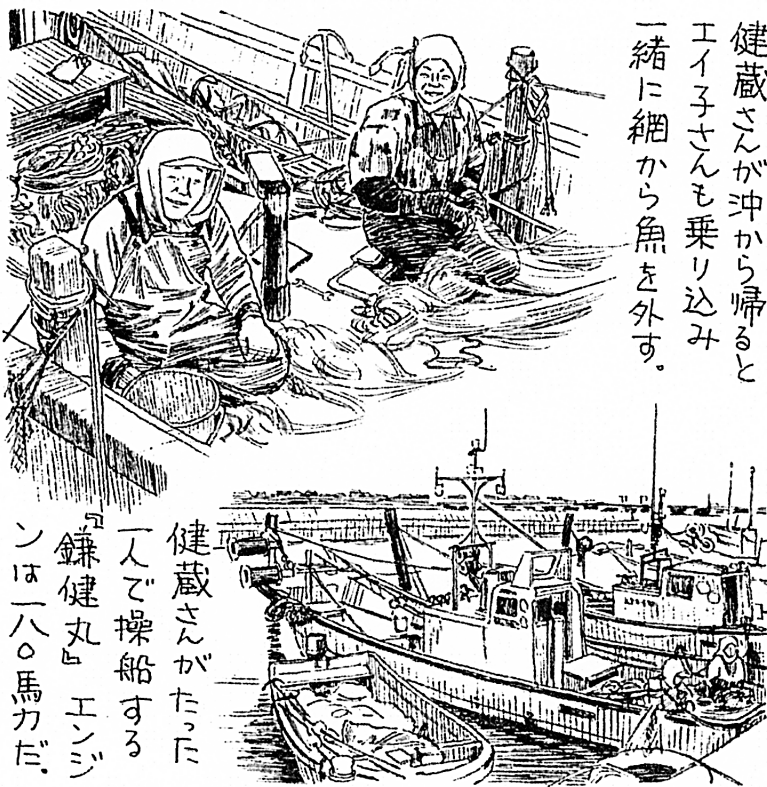
俺が本格的に海の漁をやるようになったのは渦の干拓が終わってからだな。田んぼも少しはあったども、それだけでは飯も食われね。シケの続く冬以外はほとんど海に出たな。渦での漁は「どつぴき」が許可になる九月と十月だけ。今は船の機械がなくなったから、七十四歳の俺でも網を刺

して揚げる位は一人でできる。体の動くうちは漁師はやめられねな。おもしろいもの。（健蔵さん）

父さんだば、もう沖さ行がねでけれつて頼んでも、言うごと聞かね人だもの。行がねば気がすまね人だすべ…。三月のタコ縄から始まって、ワタリガニ、クルマエビ、カレイ、キス、渦でどつぴきやって、冬のハタハタまでなもの。私は船に乗らねで網から魚を外したり網をさやめたり、陸の仕事だけだ。一番忙しいのはエビ網だすな。あれは早く外さねば死んでしまうが…。その頃になれば私も朝から晩まで天王の浜でエビを外したり網をさやめたり。父さんのお陰で、今でも忙しくさせてもらってるんす…。（笑）。

（エイ子さん）

健蔵さんが沖から帰ると
エイ子さんも乗り込み
一緒に網から魚を外す。



健蔵さんがた、
一人で操船する
「鎌健丸」エンジン
は一八〇馬力だ。